



TITLE:

# 中世貴族制の崩壊と辟召制：牛李の 黨争を手がかりに

AUTHOR(S):

礪波, 護

---

CITATION:

礪波, 護. 中世貴族制の崩壊と辟召制：牛李の黨争を手がかりに. 東洋史研究 1962, 21(3): 245-270

ISSUE DATE:

1962-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152619>

RIGHT:

# 東洋史研究

第二十一卷 第三號 昭和三十七年十二月 發行

## 中世貴族制の崩壊と辟召制

——牛李の黨爭を手がかりに——

礪 波 護

はじめに

安史の亂いごの唐中末期が貴族制社會の崩壊する時代で、その延長たる五代を含めて、次の宋いごの中央集權的官僚制社會に移行する時期として中國史上きわめて重要な位置を占めることは承認されるであらう。しかしこの『唐宋の變革』が具體的にどのような過程をへてなされたのかという段になると、まだ解決すべき問題を幾つか抱えている。その爲にもこの時代の社會の性格を正しく認識し、そのメカニズムを解明することがまず要求される。

この時代の性格がいかなるものであつたかというのは古くして新しい問題である。傳統的な中國の學問では、『藩鎮の跋扈』・『宦官の禍』・『朋黨の禍』の三つがこの時代を特色づけるものであるとする。單に政治史を中心にする傳統的な學問においてのみならず、現代の中國學者による概説もそうであり、私もこの時代の性格を藩鎮・宦官・朋黨の三者の中にみようとする從來の見解に一應同意する。これらが、貴族制の崩壊・均田農民の分解・政治體制の變化等と密接に結びついたものであることは斷るまでもない。本稿では特にこの時期の朋黨いわゆる『牛李の黨爭』を取上げた。唐中末期を彩ど

藩鎮・宦官・朋黨のうち『藩鎮』については既に幾多の勞作がだされている。しかるに唐代の『朋黨』についての研究は我が國において皆無であり、これが『宦官』と密着していたこと、陳寅恪氏が、この牛李の黨争は明經派の山東貴族と進士派の新興階級との對立であり、貴族制の崩壊・科擧制度の確立がこの朋黨の研究を通じてみられると主張し唐代政治、史述論稿、後に岑仲勉氏がその説を完全に否定している隋唐史、のを、貴族制の崩壊の過程を究明する上からも自分なりに再検討したかったことが、今このテーマを取上げた動機の一つである。そして、牛李の黨争の研究過程においてクローズアップされた「辟召制」こそ、中世貴族制社會を崩壊させた大きな要因の一つであると考えるが故に、題目をかく掲げるのである。

## 一 牛李の争い

中國史上どの王朝も、草創期には朋黨はあまりなく、終りになつて内に黨争が激化するといったことを繰返す。唐代における朋黨は大雜把にいつて前後二回にわたり盛んであつた。最初は「武韋の禍」という名で知られた事件であり、二回目がある「牛李の争い」である。前者については既に谷川道雄氏の「武后朝末年より玄宗朝初年にいたる政争について」東洋史研究 一四の四がその史的位置を明らかにしているが、特に武韋による濫官政策を取上げているのに注目したい。では後者の牛李の黨争は中國史上にいかなる意味をもつのであろうか。何れの時代にも小さな朋黨はたえずあるが、それが長期に亘る大掛りな黨争として展開された場合、單なる小人間の權力争いというだけでなく、社會の基盤において、大小の差こそあれ、變革の芽が伸びつつあつたことが注意される。とりわけ後漢末の黨錮と唐末の場合は、それぞれ中國史上、古代から中世へ、中世から近世へと劃期的な變革をとげた前奏曲としての位置を占めると豫想されるだけに、詳細な研究が要請される所以でもある。

前後八年にもわたつた安史の亂は、唐代史のみならず中國社會の發展史上の分岐點として大きな意味をもち、この期の肅・代宗朝の二十數年間は權鹽法の開始・兩稅法の成立期として財政史上重視すべきである。この亂いごの唐朝はあらゆ

る面で不安定な状態をつづけたのであつて、その打開策として徳宗は楊炎の建議にもとづき兩税法を採用した。だが、この間に財政諸使の廢止をめぐつて、劉晏・第五琦・元載・楊炎らの間に權力争いがおこり、建中年間までこの餘燼がくすぶつていた。新唐書一四・二章處厚傳この徳宗の時代は、北に河朔三鎮を控え、最初は藩鎮に對して强硬策をとつたが成功せず、朱泚の

亂で奉天にのがれる有様で、その後まつたくの姑息政策に終始した時期であつた。特にこのとき宦官を重用した點に注目しなければならぬ。朱泚の亂いご神策親軍の權が宦官の手に歸したのであり。舊唐書一八四これは唐代政治上、無視しえない事柄である。徳宗いごの唐朝は、基本的には、對藩鎮政策をいかにするかをめぐる苦惱の歴史を歩む。しかも藩鎮自立を可能ならしめたのは、それを支えるだけの經濟力が各地において伸びていたからこそなのである。

次の順宗の時八〇五年には、王叔文が牛昭容・宦官の李忠言、その他に韋執誼・王伾・柳宗元らと盛んに朋黨を結び、惡辣

な政治をしたと史書に伝えられている。これは王鳴盛が十七史商榷卷七四順宗紀所書善政、卷八九王叔文謀奪內官兵柄で論證するように、かれが

宮市の弊害を除き、宦官の兵柄を奪わんとしたために、宦官が史實に手を加え事實を曲げたのである。順宗實錄を書いた韓愈も、次の憲宗を擁立した俱文珍と親しく、王叔文を嫌つたので。蛾術編五七、俱文珍このため憲宗朝に入ると貶官された上に

遂に誅せられてしまうのである。①憲宗の元和年間の初め、李吉甫が宰相であつたが、三年四月の賢良方正直言極諫科の策

試の際に皇甫湜・牛僧孺・李宗閔の三人が時政の失を陳べて避ける所がなかつた。しかも考官の楊於陵らがこれらを上第にしたので李吉甫らが憲宗に泣訴し、そのため關係者は貶官され、牛僧孺らは不遇な目にあい、藩府に從辟されざるをえなかつた。これが牛李の争いの結怨の始であるとされる。この時の三人の對策がいかなる内容であつたのかは興味がある

が、現在、皇甫湜の策だけが残っている。皇甫持正文集三・制策一道このとき憲宗に泣訴したのは誰かという點を問題にしよう。岑仲勉

氏が指摘するように。〇九頁隋唐史四、泣訴した者を李吉甫とするのと、「權倖」或いは「貴倖」とするのとの二種類の史料が存

在するのである。皇甫湜の策には中官の權大なることの弊害を述べており、牛僧孺また王叔文派の風氣をうけていると思われる。だから、この時の攻撃は宦官だけに對するもので李吉甫が泣訴したというのは牛僧孺らによつて後に史實が曲げ

られたとする岑氏の説が成立する可能性はある。しかし、この當時に宦官として權勢を振つたのは吐突承璀の一派であり、彼らの主戰論が外廷の李吉甫らの主戰論と呼應して元和朝の對藩鎮強硬策が繼續したことを考え合ふとき、牛僧孺・李宗閔の策の中に、宦官とともに主戰論に對する攻撃がなかつたとは斷言できまい。されば李翱撰の楊於陵の墓誌銘李文公に、集一四、

會考制舉人。獎直言策爲第一。中貴人大怒。宰相有欲因而出之者。由是爲嶺南節度使。

とあるのが眞相に近く、宦官ともども李吉甫が泣訴したとして大過はなからう。このとき牛僧孺らを辯護する上疏白氏長慶集四一・論制をした白居易が常に和平論を主張し、また吐突承璀に反對した舊唐書一六六白居易傳白居易傳という點を考慮し、杜牧撰の牛僧孺の墓誌銘樊川文に、集七、

登進士上第。〔三〕\*元和四年。應賢良直諫制。數強臣不奉法。憂天子熾於武功。詔下第一。授伊闕尉。以直被毀。\*廿二史考異

六〇、登科記考一七

といへば、主戰論に對する攻撃があつたことは明らかである。<sup>①</sup>

牛李の争いの結怨の始とされる元和年間には杜黃裳・武元衡・李吉甫・裴度らの主戰論の面々が宰相として、吐突承璀が左神策護軍中尉として政局を擔當し、裴垣の州税三分説の採用等により藩鎮に對する強硬策が一應成功を収めて元和の中興と稱された時期である。この「唐室の中興」というのが、いかなる位置を占めるのかは、それ自體、問題を孕んでいるが、武力をもつて藩鎮の自立化を阻止したこの中興が中央に刺史體制の再編成といふかたちをとつてなされたという點は確認すべきである。憲宗朝のこうした動きの裏では韋貫之・李逢吉らによる用兵反對論が展開されていた舊唐書一七。憲宗から穆宗への皇位の繼承は、吐突承璀らの對藩鎮主戰論を主張する宦官勢力が王守澄・崔潭峻らの和平派の宦官勢力に敗れたことを意味した。したがつて、穆宗が即位するや八二、用兵反對派の蕭俛・段文昌の建議による銷兵の密詔がおりたのである。舊唐書一七二・新唐書一〇一蕭俛傳。憲宗朝の莫大な支出は唐朝の財政を危機に陥れたのであり新唐書一六、危機回避のため藩鎮軍隊を年々8%縮小させて唐朝からの軍事費支出を削減し且つは藩鎮軍事力を弱化せしめんとしたのがこの密詔の目的であ

つた。<sup>⑧</sup>この穆宗の長慶元年<sup>一八二</sup>の貢擧の際、楊汝士・錢徽らが知貢擧であつたが、父吉甫の李宗閔らに對する怨みを根に、もつ李德裕が異議をとなえ、ために錢徽・李宗閔らが貶官された。この事情は Arthur Waley 氏の *The life and times of Po chü-i, Chapter X, p. 134~36* に詳しく述べられているので、それに譲る。これいご李德裕・李宗閔が互いに朋黨をくんで「兩相傾軋。自是粉紜排陷。垂四十年」<sup>舊唐書一七 六李宗閔傳</sup>といわれる牛李の争いが始まつたのである。

最初に李逢吉の專制時代ともいうべき時期がある。かれが宰相となつたのは長慶二年六月のことだが、當時の宰相候補者であつた李德裕・牛僧孺のうち、德裕を浙西觀察使として追出し、こののち八年のあいだ京官に遷らしめず、一方翌年三月には僧孺をひいて同平章事とした。司馬光は資治通鑑<sup>卷二 四三</sup>に、

（李德裕）以爲李逢吉排己。引（牛）僧孺爲相。由是牛李之怨愈深。

とかいてゐる。李逢吉の權勢は穆宗から敬宗にかわつても衰えず、反つて盛んであつた。穆宗を擁立したと同じ宦官王守澄の擁立にかかる文宗朝のはじめは李宗閔・牛僧孺派の全盛期であつたが、この時期の太和五年<sup>一八三</sup>九月に維州事件がもち上つたのである。李德裕は前年十月に義成軍節度使より西川節度使に移つていたが、このことを舊唐書<sup>卷一 七四</sup>李德裕傳に、吐蕃維州守將悉怛謀請以城降。……至是悉怛謀遣人送款。德裕疑其詐。遣人送錦袍金帶。與之託云。候取進止。悉怛謀乃盡率郡人。歸成都。德裕乃發兵鎮守。因陳出攻之利害。時牛僧孺沮議言。新與吐蕃結盟。不宜敗約。語在僧孺傳。乃詔德裕却送悉怛謀。一部之人。還維州。賀普得之。皆加虐刑。

といい、牛僧孺は一維州を以て折角のチベットとの和平を破壊すれば再び首都は危機に見舞われるであらうという論をのべた。これは李德裕の功を害するためだという謗言もあり<sup>舊唐書一七 二牛僧孺傳</sup>、通鑑<sup>卷二 四四</sup>には「德裕由是怨僧孺益深」とかいてゐる。ここで胡三省が「爲武宗朝李德裕追論維州事張本」と注するように、この事件はのちのちにまで尾をひくのであつた<sup>李文 二・一九</sup>。

その後、兩派たがい盛衰があるが、太和七年二月に李德裕が文宗に對えた言葉に、「方今朝士三分之一。爲朋黨」<sup>鑑通</sup>

四二四 あるいは「今中朝半爲黨人」新唐書一七四李宗閔傳とある。この場合の朋黨ないし黨人というのは明らかに李德裕が牛僧孺黨のみを指している、しかもそれが朝士の三分の一ないし半分もいたという點は注目すべきである。文宗は兩派の餘りにひどい

黨争に嫌氣がさして、第三者の擢用を始めた舊唐書一七二李石傳。李訓・鄭注はかような背景のもとに進出してきたので、文宗の

言葉として有名な「河北の賊を去るは易く、朝中の朋黨を去るは難し」という歎きも、この頃のものである。李訓・鄭注が牛李兩黨の朝士を貶官し、人々が動搖したので出さざるをえなかつたのが九年九月癸卯朔の「告諭宗閔德裕親故更不問

罪救」唐大詔令集一〇であり、この勅は後章で問題にする。李訓・鄭注による甘露の變の失敗いご、宦官の横暴がひどくなるが、

また當時、第三勢力は遂に充分な位置を占めるのが不可能な状態だつたことを知りうる。甘露の變いご牛李兩派の者が再び擡頭し、文宗の開成年間八三六は兩派が參錯並進した時期である。次の武宗朝は李德裕の專制時代だが、かれが宰相に

なつたのは宦官楊欽義の力によるといふ幽閑鼓吹。ともかく李德裕專制の會昌年間八四三は對内外にわたつて强硬策をとり、ウイグル

を討伐し、會昌の廢佛を斷行した時代である。李德裕の專を惡む宣宗により數回貶せられ、崖州司戸となつて大中三年

八四十二月に德裕が亡くなると南部新書戊、宣宗朝は一應牛黨の時代とはいへ、牛僧孺・李宗閔ともに既に歿しており、四十年

にも亘つた黨争も漸く終りをつげたのである。この間、政權の交替毎に部下の官吏をおきかえ、政策も徹底を缺き天下を大混亂に導く原因となつた。これいご今度は南衙士人と北司宦官との對立が激しくなり、黃巢の亂をへて唐朝はほろびる。この

ようにみてくると、牛李の黨争ひいては唐中末期の政治史に宦官の活躍が目立つ。唐代の宦官が大きな勢力を握りえたのは禁軍を支配下に收めえたからであるが、根本的には、皇帝が貴族群に對抗する爲に宦官を臨時の使職に任命して實權を付與したのに由來する。唐の中使は漢の「內朝」で勢力を伸ばした尚書や中書令と類似した性格をもつたのである。

## 二 唐代の科擧

前章でみた如く、また唐鑑卷一九・長に、慶元年三月

唐之朋黨始於牛僧孺・李宗閔對策。而成於錢徽之貶。皆自小以至大。因私以害公。

と范祖禹が記すように、牛李の黨争は科擧をきつかけとして表面化した。とくに陳寅恪氏は、この黨争は明經派の山東貴族と進士派の新興階級との對立であり、山東貴族の李德裕や鄭覃は極度に進士の浮華を嫌つた。これが李黨であり、牛僧孺・李宗閔らの進士合格者たちの牛黨と長い黨争を續けたのであると論じられた唐代政治史述論稿。この見解は、張采田氏が、

沈文曾植曰。唐時牛李兩黨以科第而分。牛黨重科擧。李黨重門第。玉谿生年譜會箋三 大中二年の條の夾注

とひく沈文植の説に由來する。そこで唐代の科擧制の實態、それとこの黨争との關連性について考察したい。

唐中末期は門閥貴族の沒落と科擧官僚の進出が目立つ時期である。唐代史における科擧の意義を考へる場合、とりわけ進士が中期いご重んじられ、新興階級の登龍門としての位置を占めるといふのは先學諸氏の強調される所である。九品官人法に替つた科擧制が君主權の強化を目的に門閥貴族制に對立するものとして成立してきたことは疑う餘地はない。だが、唐代にはなお中世的貴族思想が旺盛で任子出身は進士出身に比して官界遊泳に一層多くの便宜が與えられたという一面、および科擧制は本來「門閥貴族」を唐朝の「官僚貴族」に編成がえすることを目論んだものだという點もさりながら、進士合格官吏の數の少なさにおいて、餘りに唐代の進士ひいては科擧を重視しすぎることは、また危險であるといわねばならない。唐登科記總目 文獻通考二九によるに、毎年平均進士合格者は二十三人、諸科は五人餘で、これを宋の太宗・眞宗朝の進士二三百人と同一に論じることが許されないのである。唐登科記總目の諸科は、福島繁次郎氏が考證したように中國南北制科を指すと考へてよいだろう。制科は權威ある官途となり、進士科に更に箔をつけて其の上手をいく官途となつてゐた。だからこそ、牛僧孺と李宗閔がともに貞元二十一年に進士及第したのち元和三年に賢良方正能直言極諫科に應擧し合格したのである。この牛僧孺の制科について、太平廣記 卷四九七 牛僧孺傳にひく乾闥子に、

章乾度爲殿中侍御史。分司東都。牛僧孺以制科教首。除伊闕尉。臺參。乾度不知僧孺授官之本。問何色出身。僧孺對曰進士。又曰安得入畿。僧孺對曰某制策連捷。忝爲勅頭。



と傳えるエピソードは、進士合格だけでは起家できなかった畿縣の尉<sup>正九</sup>品下を制舉によつてかちえたことを示している。<sup>⑥</sup>

唐登科記總目の諸科が制科を指すことになれば、進士と明經の合計が百人ないし二百人あるという諸史料とも矛盾しない。ではこれら科舉合格者は、當時の官僚機構の内に如何なる位置を占めたのであろうか。唐中末期における内外文武官の總數は一萬八九千人で通典四〇、唐語林三、毎年の入流者の數は千五百人から二千人程もいた通典一七、李相國論事集二。従つて、科舉合格者は入流者の内の10%以下にしか當らず、列傳記載の人物の科舉合格者の多いことに目を奪われてはならない。なお、入流<sup>入</sup>、という言葉は流外官から流内官になるのを意味し、廕で官につく場合は含まなかつた筈であるが、通典七等にも見える劉祥道の議論では廕による者もすべて含んでいるように思われる。これは廕による者の絕對數が少なかつたことを意味すると考えられ、この面からも門閥貴族制の没落を跡づけることができよう。

唐代の科舉に關する「三十老明經、五十少進士」唐摭言一という諺は、當時なお起家の官が重要で、歳をとつてからでもよいかから清官を選んだことの象徴でもあろう。許孟容について舊唐書卷一五四列傳に、

舉進士甲科。後究王氏易登科。授祕書省校書郎。

と傳えるのは、この明經が學究であるとみられる點、諺からみて奇異の感を抱かせるが、唐摭言九にのべる如く、これは當時評判になつた特殊例なのであり、進士が時勢を風靡したことは確かである。新唐書一八。進士合格者の多くは清要官で

起家したが封氏聞見記三、清流濁流の境界線という點からみて、唐摭言二に、

開元中。薛據自恃才名。於吏部參選。請受萬年錄事。流外官共見宰執。訴云。赤錄事是某等清要官。今被進士欲奪。則

(某)等色人。無措手足矣。遂罷。\*某字、據太平廣記卷一八六補、

と傳えるエピソードは興味深い。赤縣錄事從九品下が流外官出身の濁流者にとつての清要官への登龍門であるということと共に、清濁の區別の嚴存を知らされるが、同時に濁流勢力が無視しえない存在であることに思いを致すべきであらう。

ここで唐代の胥吏の實態に少し觸れると、

楊場上言曰。……臣竊見。入仕諸色出身。每歲向二千餘人。方於明經進士。多十餘倍。唐會要七五・帖經條  
例開元十七年の條

というように、入流者の内で諸色出身者の数は90%を越え、その大部分が胥吏上りである。胥吏上りの者の数が多かっただけでなく、有名な滑渙の例の如く舊唐書一五八鄭餘慶傳、日知錄八吏胥、相當な實權をもっていた。中書の主書で從七品上の官品をもつ滑渙が小吏と呼ばれているように舊唐書一四、八李吉甫傳、從七品上の官品をえても、胥吏上りの者は何時までもたつても胥吏とよばれた。

史書に胥吏とあつても流内官である可能性があつて注意を要するが、<sup>⑥</sup>黨争において、實際事務をつかさどるこれら胥吏ないし胥吏出身者をおさえ、事務を停滯させなどして官人の責任を問うやり方舊唐書一四九常衮傳も廣く行なわれたであらうと考えられる。科擧制の施行により打撃を受けた山東貴族を中心とする「門閥貴族」層の内には科擧制に順應した場合もある。

南部新書已に、

范陽盧氏。〔興〕\*自紹元元年癸亥。至乾符二年乙未。凡九十二年。登進士者一百十六人。而字皆連於子。\*紹字據唐語林四改興

とみえる范陽盧氏の場合は正にそうであり、唐朝が期待したのもこれであつたらう。

牛李の争いの發端が科擧試験の場ではなされたことは確かである。しかし、正史その他の黨争を敘述する史料が論及するものを出来るだけ多く採用して兩派に部類分けした黨派別一覽表を作成してみると、牛黨41人中、郡望の家柄20・非郡望5・不明16、李黨22人中、郡望12・非郡望7・不明3である。科擧合格が否かという點では、牛黨は41人中32人が科擧合格者みな少くも進士に合格している、李黨は22人中17人が科擧合格者内一六人が少くも進士に合格しているとなる。史書にみえる人物に限つて言えば、李黨を一概に貴族派と締めつけるには躊躇すべきであらうし、兩黨が科擧とくに進士合格という點で決定的な差異を示さな

いと言えよう。李黨も大半が進士合格者なのである。陳寅恪氏の見解には従いがたく、この點では岑仲勉氏の説が妥當だが、李德裕に黨派がなかったという隋唐のは片よつた見方であらう。列傳などに姿をみせるのはトップレベルの者だけであつて、列傳にみえる中唐いごの人物は、唐代では郡望の家柄の者が多く、進士合格者が大半を占める。これは、機械的にではあるが、孫國棟氏が「唐宋之際社會門第之消融」新亞學報四の一で既に述べた所でもある。牛李兩派のピラミッドの上

部については右に述べたことが言えるが、朋黨が朝士の三分の一ないし半分というのはこの場合牛黨のみをさしていることは明らかであり、入流者中に占める進士合格者の数の少なさからみて、これを支えるだけの数が進士のみによつては供給されないという點を特に注意したのである。また牛黨が朝士の半分に近かつたといえ、朝士の大部分が牛李いづれかの黨派に属していたことになり、しかも馬茂元氏の言う如く李商隱和他的政治詩・光明、日報・一九六一・六・一一、この時期にどちらの派にも属することを願わない人は、結局きわめて不幸な目にあわざるをえないような時代なのであつた。

### 三 辟召制と門生故吏

科擧官僚の絶對數が少ないこと、また牛李の黨争で科擧が決定的な要因とはなしがたいことは述べた。では、この黨争を激しくしたのは何か。私は、科擧よりも寧ろ對藩鎮策における和平論者牛黨と主戰論者李黨との二つの派の葛藤であると思ふ。では、兩派の勢力はどのようにして形成されたのであろうか。所で、第一章でふれた太和九年九月の「告諭宗閔德裕親故更不問罪敕」唐大詔令集一一〇、舊唐書一七下に、

（應）與宗閔・德裕或親（或）故及門生故吏等。除今日已前黜遠之外。一切不問。各安職業。勿復爲嫌。

といい、李德裕派の劉軻の手になる牛羊日曆に「（京師語）曰。門生故吏。非牛則李」とあり、李珣撰の牛僧孺の神道碑銘唐文粹に、

前後作鎮。皆佩相印。辟署多名人。難於進而勇於退。

と書かれていると、牛李兩派の勢力の形成と擴大に「辟召制」が大きな役割を演じたのではないかという豫想にわれわれを導かざるをえない。よつて、當代の辟召制の實態と、この黨争と辟召制との關係について考察しよう。

唐中期いごに設けられた令外の官たる數多くの使職は、この時期には普遍的となり、既成の官以上の實權を有つに至つた。長官の使は天子の任命によつたが、その判官以下の下僚の任命は長官たる使の辟召によつてなされた。その結果、こ

の辟召制が一般的に行なわれたのであつて、この點を見逃すと當時の社會を十分には復元できない。辟召制による故吏と辟命者とおのずから一つの官僚勢力をつくりあげていくのは必然的であり、門生・故吏を多數擁する官僚が一大勢力を形造り、これが後漢末の黨錮事件を誘致したのであつた。古代末期に行なわれた黨争が辟召制と深い關係があつた點は充分注意されてよい。南北朝の貴族制社會において、地方州郡の屬官は永く長官の辟召にかかつていた。所が、隋の文帝が地方制度の大改革をするに際して、この辟召制の全廢を斷行したのであつた。濱口重國氏の卓論「所謂隋の郷官廢止に就いて」<sup>加藤集説</sup>が明らかにしたように、州縣の上層部、品官該當者を悉く中央からの派遣に改めたのであり、

六品以下官吏。咸吏部所掌。自是海内一命以上之官。州郡無復辟署矣。

と通典<sup>卷一</sup>に述べる通り、隋の中央集權的政策により總ての官は吏部を通じて任官するようになった。本籍地回避制の嚴存に照らせば、辟召制廢止の影響は甚大である。ここに科擧制が開始され、これらの諸制度がそのまま唐に引繼がれたのであつた。ところが今や、「使職」に付隨して辟召制が復活してきたのである。但し、「官」の體制においては吏部一本の制が存續している點、前代と事情を異にする。

唐代における辟召制に關する議論ないし實際は、新唐書<sup>卷四</sup>選舉志・通典<sup>卷一</sup>選舉典雜議論下・文獻通考<sup>卷三</sup>選舉考辟舉・冊府元龜<sup>卷七二八</sup>幕府部辟署にかなり纏つた記載があるが、兩唐書列傳等からも具體例を多く抽出しうる。隋代に辟

召制が全廢され、唐はそれを繼承したものの、しばしば復活しようという意見は出された。太宗朝の杜如晦<sup>唐會要七四・論選舉事</sup>、武后時代の魏玄同<sup>新唐書・四五</sup>、玄宗朝の張九齡<sup>曲江集一〇</sup>らがそれぞれであり、德宗朝になると沈既濟が辟召制の復活を論じ、この

議論は通典<sup>卷十八</sup>の全部を占める程詳細なものである。貞元八年五月には宰相となつた陸贄がやはり復活をのべ<sup>陸宣公翰苑集・七</sup>官擧屬吏狀、德宗は一旦は彼の意見を採用したが、結局、實施されなかつた。ともかく、「官」の系統では辟召制は公式

には行われなかつたのである。しかし、使職の下においては、沈既濟が述べるように、また韓愈が「後十九日復上書」<sup>韓昌黎集一六</sup>で、

前五六年時。宰相薦聞。尚有布衣蒙抽擢者。與今豈異時哉。且今節度觀察使及防禦營田諸小使等。尚得自舉判官。無問於已仕未仕者。況在宰相。吾君所尊敬者。而曰不可乎。

と書き、各使が已仕のもの未仕の者を問わず判官に辟召していることを傳えるのであつて、使職が體制外の存在であつたことに鑑みれば、辟召以外に下僚を採用することは不可能でもあつた。陸贄と共に宰相を拜した趙憬は審官六議舊唐書一三八列傳の一つに、

議擢用諸使府僚屬。則曰。諸使辟吏。各自精求。務於得人。將重府望。既經試效。能否可知。擇其賢能。置之朝列。

と述べ、使職下の僚屬の辟召は人選がよく、それらの者を正規の官僚機構の中に組込むのが良策とし、沈既濟も、

向令諸使僚佐。盡授於選曹。則安獲鎮方隅之重。理財賦之殷也。通典一八

と、使職下の辟召を顯彰しているのである。

諸使の辟召の人選が秀れていたというだけでなく、宋の洪邁が「唐藩鎮幕府」容齋續筆一で、

唐世士人初登科或未仕者。多以從諸藩府辟置爲重。

と言うように、さなきだに多くもなかつた科擧合格者の内で、最初に官に就かず藩府職使の辟召に應ずる者が多かつたとい

う状態が當時の有様だつたのである。容齋續筆の文は科擧合格者全體を指しているので、文人も例外ではなかつた。明・胡震亨・唐音癸籤二七、明・王世貞・全唐詩說

杜甫が嚴武に、韓愈が董晉ついで張建封に、李商隱が科擧に合格する前に令狐楚の幕に、それぞれ辟せられたのは著名であるが、韓愈の「送董邵南序」韓昌黎集二〇に、

燕趙古稱多感慨悲歌之士。董生舉進士。連不得志於有司。懷抱利器。鬱々適茲土。吾知其必有合也。董生勉乎哉。

というの、たしかに科擧落第者が藩鎮の幕僚として赴いた實例であらう。鈴木虎雄氏がこの文によつて「唐の藩鎮跋扈は或は此等不遇の士が裏面に活躍して起せるものならんも知るべからず」とされたのは唐の進士・支那學四の三

り、藩鎮の幕僚となるのは當時の士人の常態だつたのである。吉川幸次郎氏・唐代の詩と散文一〇四頁ただこれら藩鎮における辟召も、使職體

制下における辟召制の一環として存在したという點は確認しておく必要があるであらう。

これら使職そして藩鎮に辟召された者が官僚機構としてはどういう待遇になるかの問題がある。官に就いている者が兼ねた場合は論外だが、その他の場合には、胡三省が「唐制。藩鎮及諸使僚屬。率帶檢校官」通鑑二・四六「御史。幕僚所帶寄祿官。亦謂之憲官」同二と注するように、御史中丞・侍御史・監察御史などの憲官を寄祿官・檢校官として帶びることが多かつた。⑩正史や金石文たとえば金石萃編六六・〇震經幢に試某某官とあるのはこれら寄祿官のことである。

使職下の幕職官が辟召されるのは當然であつても、藩鎮が權力を擴大するにつれて、地方の州縣官までも觀察使が自ら辟署するようになってくる。新唐書卷一八韓休傳には、

累遷桂管觀察使。部二十餘州。自參軍至縣令。無慮三百員。吏部所補纔十一。餘皆觀察使商才補職。飲下車悉來謁。⑪とあり、韓休が州縣官の九割までも自ら辟署したことを傳えるが、これが特例ではないような状態になつていった。かくて舊來の官制は大きく切り崩されていくのである。

具體的な例を挙げると、劉晏について、

初晏分置諸道租庸使。慎簡臺閣士專之。時經費不充。停天下攝官。獨租庸得補署。積數百人。皆新進銳敏。盡當時之選。新唐書一四九列傳

……晏歿二十年。而韓洄・元琇・裴腆・李衡・包信・盧徵・李若初。繼掌財利。皆晏所辟用。有名於時。新唐書一四九列傳と傳えるのは、當然のことながら、財政諸使においても辟召制が行なわれ、しかも辟召された人物がのちに鹽鐵使・度支使となつて國家の財政を總轄しているのである。

本稿が問題とする、牛李の黨争がこの辟召制とどのように結びつくのかを検討しよう。まず李逢吉は、彼を取巻いた八關十六子のうち張又新・李續之を辟召しているし舊唐書一六・牛僧孺の場合には、李珣がとくにその神道碑銘に書いた

ように多くの人を辟召している。かれが辟召した具體的なメンバーは、盧簡求舊一六三・杜牧唐語七・柳仲郢舊一六五・韓休舊一〇一・劉

蕡舊一九〇下・韓昶全唐文七四一・李珣新八二らであるが、たとえば韓休のばあい、既に述べた如く桂管觀察使となつたとき幕職官の外

に州縣官を三百人近く辟召しているのであつて、これら被辟召者のピラミッドは相當大きなものであると豫想しうるのである。李絳は楊漢公<sup>新一</sup>を、令狐楚は劉黃・李商隱<sup>七五</sup>ともに舊を、楊嗣復は李福<sup>新一</sup>を、楊汝士は魏謩<sup>七六</sup>を、李宗閔は周墀<sup>八二</sup>を、それぞれ辟召した。これらは牛黨の例であるが、李黨の場合も同じであつて、李德裕は劉三復<sup>七七</sup>・鄭亞<sup>八五</sup>らを辟召した。とくに劉三復について舊唐書列傳および冊府元龜<sup>七九</sup>に、

(李) 德裕三爲浙西凡十年。三復皆從之。太和中。德裕輔政。用爲員外郎。居無何罷相。復鎮浙西。三復從之。汝州刺史劉禹錫以宗人遇之。深重其才。嘗爲詩贈三復。序曰。從弟三復。三爲浙右從事。凡十餘年。往年主公入相。薦用登朝中。復從公之京口。未幾而罷。昨以尚書員外郎。奉使至潞。旋承新命。改轅而東。三從公皆在舊地。徵諸故事。復無其比。因賦詩餞別以志之。又從德裕歷滑臺・西蜀・揚州。累遷御史中丞。

と傳える劉夢得文集六・送從弟郎中赴浙西參照。李德裕と被辟召者との關係を推測する上において、極めて興味深いことである。これを全くの例外であると簡單に片づけるべきではない。

このような辟召制における被辟召者が「故吏」なのであり、廣く門生故吏とも呼んだ。これは南北朝時代の例からも言いうるが、たとえば舊唐書<sup>卷一</sup>劉晏傳に、

故晏沒後二十餘年。韓洄・元琇・裴腆・包佶・盧徵・李衡。繼掌財賦。皆晏故吏。

という「晏故吏」は、先に引用した新唐書列傳に「晏所辟用」とあつたことから明らかである。門生には貢舉門生を指す場合も勿論あつた。<sup>8</sup>尚、唐代の諸文獻に門生故吏という言葉の見えるのが、概ね玄宗朝ごろからであるのも注意されてよい。されば、牛李の黨争に關して、韋處厚の「請明察李逢吉朋黨疏」<sup>全唐文七一五・冊に、府元龜八七五訟冤</sup>

今(李)逢吉門生故吏。遍滿朝行。侵毀加誣。

とあり、舊唐書<sup>卷一</sup>李紳傳に「逢吉令門生故吏結託(王)守澄爲援」という如く李逢吉の門生故吏が活躍し、本章初めに引いた牛羊日曆や告諭宗閔德裕親故更不問罪敕<sup>全唐文七二</sup>の除朋黨禁詔から、牛李兩黨が共に多數の門生故吏を擁していたことを知

りうるが、<sup>④</sup>これらが辟召制の產物であることは明らかである。この辟召制が黨争と關係が深かつた原因は、當時の社會における藩鎮勢力の強大さに基くものであると言えよう。黨争の終末が、それら唐朝側の藩鎮の實權が文臣より武臣へ移つていつた頃および唐朝に上供する藩鎮が減少した頃と一致するのも偶然ではありえない。兩派の首脳陣が中央から迫られた時、概ね節度使として出されている點は特に注意すべきである。<sup>⑤</sup>節度使として中央から出ることは格下げを意味したが、かれらがしばしば出鎮した淮南・四川・山南・浙西といった所は、唐朝にとつて極めて重要な地點であつた。これが辟召制と相まつて、すなわち節度使・觀察使となつて下僚を辟召し、それらを連れて歩くことさえしたので、「牛李が互いに傾軋すること四十年」を可能ならしめたのである。今まで兩派のピラミッド構成における辟召關係を無視し、科擧問題にのみ焦點を合せていたのを飽足らなく思う譯である。

#### 四 貴族制の崩壊と辟召制

では「牛李の争い」及び「辟召制」は貴族制の崩壊の過程において如何なる位置を占めるのであろうか。牛李の兩黨が、ともに上層部は多く郡望の家柄・進士合格者によつて占められているばかりでなく、その下層部に新興階級を辟召によつて補充し、それら門生故吏が充滿して、その限りでは兩派の異質性は探りえない。その點において、たとえ上層部が科擧をきつかけにして争つたのは事實であつても、一旦、朋黨ができると、功利的な面の方が表面にでるので、その社會的背景・出自のことを詮索するのは穿ちすぎて正鵠を失うのではないかとも思う。<sup>⑥</sup>しかし、この黨争が四十年もの長期にわたつた點には注目せねばならぬし、牛黨・李黨が實權を握つた時の政策がまったく異つたことは無視しえない。牛黨が實權を握つた時期にはいわば現狀維持論、對藩鎮・對夷狄については和平論に終始したのである。正史や通鑑によつても兩派の首脳たちの意見の差異には改革論、對藩鎮・對夷狄には強硬主戰論に終始しているのである。また李德裕の李文饒文集をみれば李黨の積極論を見るをえ、李絳の李相國論事集や牛僧孺の「守在四



夷論」唐文粹からは容易にかれらの和平論を知ることができる。一體、主戰論・和平論、改革論・保守論というのは時代と地域をこえて常に存在するものでもある。現われ方が問題なのであらう。

牛李の争いにおけるこの政策上の差異については既に先人も指摘するが、とくに岡崎文夫氏はこれを強調される支那史概説上。

即ち、憲宗の死後、裴度・李德裕らの統一主義と牛僧孺らの現状維持による平和論との二つの潮流が時論を支配し、黨争が激烈を極めたとされた。このようなとらえ方が岡崎氏の史學の特徴であり秀れた點なのであるが、氏が更に進んで、

劉蕡や杜牧の如き時政を痛烈に批判した自由な論議者は自然裴度・李德裕の流に屬する者と解してよい、と言われると、行過ぎであると言わなければならない。こう簡単に圖式化できないのであつて、劉蕡は牛黨の楊嗣復の門生であり玉泉子、

筆禍事件後、かれを辟召したのは牛僧孺・その黨令孤楚であつた舊唐書一。杜牧も牛黨の人物である。しかし、牛李の兩

黨がその政策を別にしたことは確かであり、これこそが、この黨争の最大の特徴であると言ふことができる。では、この時點においてどちらの派がより新しく、どちらがより古い面をもつのであらうか。

ここで問題となるのは地主・富商といった民衆上層部の動向であらう。長慶二年三月に銷兵策が撤回されて兵員の削減を禁じ舊額の維持を命じた時、藩鎮に賄賂をおくり列將に補せられんことを望んだのは商賈と胥吏であつた通鑑二。彼ら

の意向が多方面に影響したであらうことは想像に難くない。牛李の黨争がこの長い期間たがい傾軋しえたのは、双方に彼らを含めた利益受益者の層が厚かつたことを意味するであらう。思うに、對藩鎮について強硬主戰を主張するのはより

保守的なもの、すなわち官僚貴族化した舊門閥貴族層であつて、この時點においては唐朝の權威を擴大することによつてのみ彼ら自身の權威しかして勢力を維持しえたのである。これに對して、改良派ともいふべき、藩鎮をも包んでいこうとする和平論に終始した人々は、この時點では、より新しい層と言ひうるのではなからうか。建中二年の沈既濟の上言

唐會要二に、  
六待制官に、

臣常計天下財賦耗斂之大者。唯二事焉。最多者兵資。次多者官俸。其餘雜費。十不當二事之一。

とある如く、國家財政にとつて兵資と官俸とは二大支出源であるが、とくに軍事費は莫大なものがあつた。従つて、主戰論者たる李德裕が浙西に鎮した場合に苛斂誅求をやり、王智興の僧尼私度を彈劾し、西川に於ても「徵逮懸錢三十萬緡百姓愁困」<sup>通鑑二四五</sup>といつた無理な取立てをし、中央で會昌の廢佛をやつてのけねばならなかつたのである。江淮の富豪の

戸が捉錢戸になつて影庇し私茶私鹽を犯すのを李德裕が彈壓したことや、牛僧孺と李宗閔が昭義節度使劉從諫と交通したといわれ、その劉從諫と在地の富商層との結託が著しいこと<sup>通鑑二四七</sup>からも、牛黨が新興の富豪大賈層と關係が深かつたと言える。李德裕・鄭覃が進士出身者を嫌つた<sup>新唐書選舉志</sup>という點からも、李黨の方が古い側、牛黨がより新しい派と言いえよ

う。李吉甫が僧の莊礎の免税に反對し、減官政策をとつた<sup>新四六</sup>ことが、子の德裕の私度彈劾・廢佛・減官政策にそのまま受繼がれている。史料に現れる限りでは牛黨に辟召の例が多いのも、或いは辟召制をもつとも有効に利用したのは牛黨であると言えるかもしれない。この黨爭が結果的には牛黨の勝利に終つてしまつたのも、便宜的な言葉でいえば、大勢の赴くべき所だつたのであろう。だが我々は兩派の下で辟召を通じて官界に進出した新興層にこそ、多大の注意を拂わねばならない。

唐の貴族制は南北朝以來の「門閥貴族」制を受繼ぎはしたが、唐國史補<sup>卷上</sup>に「四姓。唯鄭氏不離滎陽」とあつて、崔盧李鄭の四姓のうち鄭氏以外は本貴を離れていることを述べ、朱子語類<sup>卷二</sup>に「唐官皆家京師」といい、南部新書乙に「諸名族重京官而輕外任」<sup>唐詩紀事四六</sup>とあるように、「官僚貴族」化してしまつていた。大量の進士を輩出した范陽盧氏、それに太原王氏<sup>守屋美都雄氏・六</sup>・天水趙氏<sup>福島氏前掲書</sup>は山東貴族を中心とする舊門閥貴族の官僚貴族化した好適例であり、唐朝に寄生せざるをえぬ状態となつていた。その彼らの位置を支えたものこそ、南北朝時代の辟召制を吸収した隋以來の官僚制であつた。梁書<sup>卷一</sup>楊公則傳に、

湘俗單家以賂求州職。(湘州刺史楊)公則至悉斷之。所辟引皆州郡著姓。高祖班下諸州。以爲法。

とあるように、從來の貴族制度において、州郡僚屬の辟召制度こそ貴族の特む牙城であつた。隋唐兩朝は「門閥貴族」制を

支えていた中正制とこの辟召制を廢止することによつて、君主權の強化・中央集權の徹底を期し、かれらを「官僚貴族」化することに成功したのである。<sup>③</sup>隋文帝がこの改革を斷行しえたのは、既に貴族勢力が弱體化しつつあつたからであらう。

北朝では崔亮の停年格が作られた頃には人事進退の實權は全く吏部の手に歸していた。これがのちの循資であるが、全くの官僚制の產物である。南朝については、最近、川勝義雄・吉川忠夫兩氏が何れも梁と陳との間、侯景の亂を境に貴族社會の面で大きな溝のあるのを指摘されているのは<sup>東洋史研究</sup>二〇の四<sup>④</sup>、尊重すべきである。そのような背景があつたが爲に、辟召制廢止の意圖が實を結び、門閥貴族は官僚貴族化せざるをえなかつたのである。

唐の官僚體制は三省六部を中心に官僚貴族制を維持しようとするものであつた。その「官僚貴族」體制に對立するものとして唐中期いごに新たに設けた數々の使職は、君主權をより強化することを意圖して設置されたものである。これは白居易の「鹽商婦」<sup>白氏長慶集に、</sup>四・新樂府

墾作鹽商十五年。不屬州縣屬天子。每年鹽利入官時。少入官家多入私。官家利薄私家厚。鹽鐵尚書遠不知。

といい、使職の一たる鹽鐵使による鹽專賣の一環を擔う鹽商が正規の官僚機構としての州縣に屬さず天子に直屬す、と言うことから明らかである。この使職に伴なつて復活した辟召制により進出したのは、既存の唐的官僚貴族層に對立する新興地主層であつた。使職體制下の辟召制が普遍化するや、朱子語類<sup>卷一三八に、</sup>本朝法制

至唐中葉而長史・司馬・別駕皆爲貶官。不事事。蓋節度使得自辟置官屬如節度觀察推判官之屬。此既重則彼皆輕矣。

というように、州院の官が貶官の名になつて職事をもたなくなる程、舊來の體制が崩されていつたのである。この使職とくに藩鎮に、科擧試験の合格者およびそれに數十倍する落第者が辟召されるのは何ら差支えなかつた。もし唐代の科擧が本來の意圖通り、門閥貴族制を覆えし君主權の強化に利用されていたら、さほど多くない新興地主階級の科擧合格者とくに進士登第者<sup>⑤</sup>を吏部でチェックするようなことはありえず、韓愈も苦勞しなかつたであらう。吏部で落したから辟召に應じさせたのである。科擧も使職下の辟召制も共に君主權の強化を意圖したが、唐代にあつては兩者とも目的通りには

運用されなかつた。五代をへて宋に至るの間、科擧は殿試の採用とも相まつて當初の意圖に副うようになったが、辟召制の方は、後唐同光二年九二四八月の中書門下の上言舊五代に、史三二に、

請今後諸道除節度副使・兩使判官外。其餘職員并諸州軍事判官。各任本處奏辟。從之。

とあるように、この頃から使職下僚の上層部の任命は中央からなされるようになり、宋の太祖・太宗兩朝の間に残りも漸次廢止された。文獻通考三九この間の事情は、神宗朝の蘇頌が、

祖宗深鑒此弊。一切釐改。州郡僚佐。皆從朝廷補授。大臣出鎮或許辟官。亦皆隨資注擬。滿歲遷秩。並循銓格。非復如

唐世之比。續資治通鑑長編二一一。熙寧三年五月癸卯

と述べているのが簡にして要をえている。

では何故貴族層が對立する筈の新興層を辟召したのか。これは現實をふまえてのこと、地方での辟召を許せば新興地主階級の實力者達を辟召するのは必然的であり、自らの墓穴を掘るとはさほど意識しなかつたであろう。この黨爭の場合も、新興の實力者たちを自己の陣營にとり入れることを要請されたであろう。されば唐朝の官僚機構を兩派とも出来る限り利用したことは疑いなく、科擧制にしろ辟召制にしろ自己陣營の擴大に有効に利用したと考えられる。進士を極度に嫌つたという李德裕が、劉三復を「遣詣闕求試。果登第」北夢瑣言一というように、援助して合格させているのである。ここで確認しておくべきは、南北朝の辟召制はすべて實官を伴つたが、今度のは寄祿官を伴なうのが普通であつて（寄祿官から實官へ横すべりする事例もかなりあつた）、武韋による濫官政策と一脈相通じるものがあつた。宋の士大夫階級は、門閥貴族の系譜もひかぬばかりか「官僚貴族」の系譜もひかないのであつて、唐宋五代を通じて何回となく繰返された辟召の最後の段階の被辟召者層が宋の士大夫層なのである。而して彼らが何によつて産をなしたのかは別の必究さるべき課題である。

辟召制の名高いのは南北朝時代で貴族的に運営されたものではあるが、辟召制という制度そのものは超時代的なもので

ある。また「貢擧」としての科擧が「詮選」としての辟召制と兩立できないわけではない。だから、たとえ王夫之が沈既濟の辟召復活論をこき下し讀通鑑、趙翼が反對論を述べても陔餘叢考一六・郡、黃宗義明夷待訪錄・顧炎武顧亭林文集一は辟召制を高く評價する。しかも顧炎武の場合、「生員論下」亭林文集一、日知錄集釋一七生員類攷では辟召と生員の並存を説いているのである。唐の辟召制は貴族制に對するアンチテーゼとしての意味をもつたが、宋代にこれを廢止して中央集權を強化するのには大變な努力を要した。例えば地方制度の面で使院と州院とを一本化するにも複雑な經過をたどつたが宮崎市定氏・宋代州特色・史林、一方、使の系統の者をいかに朝班にくり入れるかが、後唐の明宗頃から問題になる舊五代史四三・長。これいご清朝に至るまで、正式には、恒常的には辟召制は採用されなかつた文獻通考三九・欽定續通考四五・皇朝通考五八のである。

## 五 後世の朋黨論

牛李の争いが、後世においてどのように受取られてきたのかは、歴史を學ぶ者として興味をそそられる。司馬光の朋黨論溫國文正司馬公文集七一にひかれてゐる黃林石の壞唐論には、

以爲。壞唐者。非巢・溫與閹豎。乃李宗閔・李德裕朋黨之弊也。

と述べ、唐を壞したのは、いわゆる農民反亂巢・溫でもなければ藩鎮朱でもなく、更には宦官でもなく、牛李の黨争の弊害なのだとする。その黨争が科擧をめぐつてなされたとは、唐鑑卷一にもいい、章如愚も羣書考索續集卷三に、

故有因權勢以相傾奪如牛李之黨。由於錢徽典擧之日。至於互相磨軋者四十餘年。

と書いてゐる。李德裕・鄭覃らが進士の浮華なるを嫌つたというのは、たとえ進士の弊はあつても、「李衛公德裕。以己非科第。常嫉進士」唐語林七、玉泉子、というのが案外真相を傳えたもので、新興の實力者たちを警戒していたと言えよう。その意味で、唐摭言卷七に「李太尉德裕頗爲寒賤開路」とあるのは奇異に感じられるかもしれないが、異質の史料として放擲するべきでなく、范攄の雲谿友議卷中にも「(贊皇)削禍亂之堦。開孤寒之路」とあり、これも一面の眞實を傳えたものであると

考えてよい。舊門閥層のみで李黨のピラミッドを構成するのは既に不可能なのであつて、門閥のない寒賤・孤寒と當時よばれた新興地主層を辟召などにより自己の陣營を固めるべく吸収したことが分るので、これらが李德裕の門生故吏と呼ばれたのであらう。一方、牛黨の上層部の一部が科擧による同年進士・貢擧門生といった關係で固められたといわれている。日知錄<sup>卷一</sup>「座主門生」・「同年」の條などに指摘されているのも無視すべきでないと思う。

兩黨に對する後世の評價は、對夷狄とくに維州問題が一つの焦點となつてゐる。最初に取上げたのは司馬光であつて、資治通鑑<sup>卷二</sup>四七に、

德裕所言者利也。僧孺所言者義也。……以是觀之。牛李之是非。端可見矣。

と述べる。だがこれ以後の論者は、陳垣氏が通鑑胡注表微<sup>卷一</sup>五で詳論したように、宋の胡寅の讀史管見<sup>卷二</sup>五・明の胡廣の

「牛李維州事」<sup>明文衡</sup>五五など概ね李德裕を擁護するが、現在の時點において考えると一概に是非を決めがたい。維州の立地

條件・當時の唐の國力を度外視した空論は避けなければならぬからである。私は、會盟後のこの時期に再びチベットと武力抗爭をする方が良いという意見には俄に賛成しがたいものを覺える。岑仲勉氏は維州の放棄の不可なるを力説し、維州はあたかも現在の臺灣の如きものであるという<sup>隋唐</sup>史。維州問題で李德裕を非難した司馬公も、會昌の廢佛を支持している

のは明らかである。この兩者を含めて、これらの人々の意見は讀者を豫想した、惡くいえば時流に媚びた點が感じられる。司馬光の維州事件への態度は、當時の新法・舊法の争いにおける態度につながり、廢佛へのそれは、宋代における時論でもあつた。この黨争と直接結びついて實錄の改變が行なわれたのは特記すべきで、また穆宗實錄と敬宗實錄とが對立し、劉軻の牛羊日曆・舊唐書李德裕傳が李黨側の史料で書かれたと通鑑考異は述べても、それら實錄類が残つていず、傍證史料も少ないことが研究の障害でもある。が、一つには李翱の「百官行狀奏」<sup>李文公</sup>集一〇に言うように、門生故吏が作つた文章によつて史書が作られているのにも關連するのである。

## おわりに

唐から宋へ、この變革は賦稅制の面では租庸調法から兩稅法に替つた點に劃期的なものを認める。兩稅法開始の有する史的意義は既に先學の指摘があるが、貴族層への影響という點からみて、兩稅法が人民による土地私有を確認した法であり、人民の現在所有地・居住地を重要視するに至れば原籍すなわち郡望を無視することになつて門閥貴族制・貴族政治を破壊する上に力があつたという<sup>内藤虎次郎氏・中國近世史三一頁</sup>のは確認しえよう。しかし、宋いごの士大夫地主に「官僚貴族」の系統を引く者が殆んどいないという事實は、兩稅法的土地所有の確認だけからでは論理的にも説明されないことは明らかである。門閥貴族制から官僚貴族制への移行の説明はなされうるが、官僚貴族制の沒落、すなわち、貴族的地主が宋いごの士大夫的地主にそのまま移行したのでないことははつきりしていても、その移行がいかになされたかは充分に説明されない。所で、前近代社會の中國においては官僚稼業がもつとも割のよいものであつたという點は確かであり、政治機構内部に這入込みうるかどうか極めて重要なのであるから、この時期に「官僚貴族」層が沒落した過程とともに、貴族層以外の新興地主富豪層が如何にして政治機構の内部に入つてき、特權商人となつたりしたのかは是非とも明らかにせねばならぬ事柄である。長安に家しその近郊に土地をもつた者が殆んどだつた唐の「官僚貴族」にとつて朱全忠により汴州に國都が遷されたのは大きな打撃であつて、これと朱全忠が汴州の在地有力者すなわち新勢力を代表する商人に密接に結びつく地方政權として出發したということ<sup>堀敏一氏・朱全忠の廟子都・和田古稀論叢</sup>とは唐的官僚貴族が沒落する過程を示唆するものである。一方、「貴族よりも貴族的」といわれる中國近世インテリゲンチヤをその中から生みだしたこれら新興層の政治の舞臺への進出の場として、これまで、隋から始まつた科擧制を重視してきたのは極めて當然なことであつたと言えよう。しかし科擧と同様に、むしろそれ以上に、唐中期いごの辟召制が大きな役割を果したのである。辟召制の存在により新興階級が既成の官僚制に頼りきる必要がなくなつたのであつて、ここにその最大の史的意義がある。

隋代に始まつた科擧制はそのまま唐に受繼がれたが、とくに則天武后は進士を重用し、濫官政策と相まつて新興の地主階級を政治の世界に吸収するようになった。武后の治世は歴史の上昇の勢いを推し進めた時代であつた。だが、このままの體勢が何の屈折もなく續いて宋の社會を形成したのではない。その點、谷川氏が開元初年の政治方向は基本的には反動政治たるを免れなかつたとされた前掲論文のは正しい。安史の亂いごの狀勢にこそ、正にそれら新興層の廣汎な進出がみられたのであつて、それが辟召制と密着した藩鎮體制によつて裏打ちされていたのである。

地方に藩鎮が割據する九世紀の前半、前後四十年にも亘つて中央政局で爭われた牛李の黨爭は、いつの時代にも潜在的には存在する主戰論と和平論・現狀打開派と現狀維持派の争いの顯在化というかたちをとり、科擧官僚の急激な増加・使職下の辟召による新興層の大幅な進出・舊貴族の最後の抵抗といった情勢の反映として政治の舞臺で展開されたものである。この黨爭の終結いご唐末の諸反亂をへて五代十國の世となるが、この間に貴族制社會は完全に終り宋いごの新しい社會の擔い手が確實に自身の立場を強固にしていた。魏晉南北朝においては辟召制によつて門閥貴族制が維持されたが、唐中期いご、今度は同じ辟召制という殻を通つて新興層が進出し、遂に官僚貴族制を崩壊させた。この辟召制が大きな意味をもつた時代（曹魏—五代）それが中國史における中世なのである。

### 註

① 舊紀には順宗朝の善政を數多く擧げるが、これらは總て王叔文らにより立案施行された。特に宦官と藩鎮に對する強硬策は當然かれらの強い反感をかい、宦官俱文珍らは皇太子を擁立して憲宗をたてた。この際、宦官のみならず、藩鎮が王叔文らを延いては順宗を忌避して俱文珍らの後援をした點は注目すべきである。こうして擁立した憲宗が周知の如く對藩鎮強硬策をとつたのであるから皮肉である。その點、重澤俊郎氏が「柳宗元に見える唐代の合理主義」（日本中國學會報

三）で、憲宗としては王叔文勢力と巧みに合作しても何等矛盾は無かつた筈であるに拘らず、却つて之に彈壓を加えたのは全く中間勢力に動かされたに外ならないと論じられたのは首肯しうる。ただ對宦官策が兩朝の間で異なる點は考慮すべきであらう。

② 唐代に「牛李」といふとき概ね李德裕派が牛僧孺と李宗閔の二人を併せ指し、李德裕を指さなかつたといふのは、既に趙翼が陔餘叢考卷二十牛李非李德裕の條で指摘した通りである。反つて李德裕と李宗閔の二派を二李と呼んだりした（舊



唐書一七六、唐史論斷下)。しかし通鑑(卷二四三・二四七)や容齋續筆(卷五) いご概ね牛李の李は李德裕を指すようになったので、便宜上、後世の呼稱に従つてこの兩派の争いを「牛李の黨争」と呼ぶことにする。

⑧ この銷兵の密詔は、對藩鎮策それに當時の政界の實状をみる上で重要なものだが、密詔という点からも詳細な記載がなく就中いつ出されたのかはつきりしない。松井秀一氏は「唐代後半期の江淮について」(史學雜誌六六の二)でこの年次をきめようとし、元和十五年正月に出されたものと思うとされた。所で舊唐書(卷一七二)蕭俛傳には消兵の詔の記事に續いて「明年。朱克融・王廷湊復亂河朔。一呼而遺卒皆至」とあるが、この兩人の亂は長慶元年七月と八月のことである(舊紀)。また王承元が鎮州を去つた後に密詔がおりたことが分るが(舊紀一六)、彼が鎮州を去つたのは元和十五年十月乙酉である(舊紀)。よつて、密詔は元和十五年十月乙酉から十二月の間に出了たことを確認しうる。チベットとの長慶の會盟も、中國側の事情としてはこのような一連の政策と關係のあつたことは確かである。

④ 增淵龍夫氏は「漢代における國家秩序の構造と官僚」(中國古代の社會と國家)において、武帝以降の官僚制における黨派の發生を、中央における政治機構が實質的な政府たる内朝と形式上の政府としての外朝とに二分したという點に求め、これと、任俠的習俗の一つの表現である門生故吏の依付關係が選舉請託に結びついたことが、黨錮の禍をもたらしことになったとされている。

⑤

制舉合格によつて畿縣の尉になれるというのは、牛僧孺の外にも李宗閔(新一七四)の洛陽尉、李珣(新一八二)・李絳(新一五二)・鄭畋(新一八五)の渭南尉など幾多の例があるが、皆さきに進士に合格している。また進士と畿縣の尉との關係からみて、沈亞之の「櫟陽兵法尉廳記」(沈下賢文集六)に「永貞前。諸畿自進士而得尉而昇班者十六七。他入之尉而昇者百一二」とあるのは出世コースの點から興味深い。舊唐書(卷一五八)鄭餘慶傳に「詔中丞宇文邕・刑部侍郎張臧・大理卿鄭雲遠等三司。與功德使判官諸葛述同按鞫。時議以述胥吏。不合與憲臣等同入省按事。餘慶上疏論列」とあつても、功德使判官なるが故に胥吏なのでなく、諸葛述が胥吏上りなのだというように理解すべきである。

⑦

「牛黨」四十一人。

① 郡望の家柄20。(進士と制科)李宗閔・李絳・楊嗣復・蕭俛・馬植・杜牧・李珣(明經も)、(進士のみ)李逢吉・韓偓・李固言・楊虞卿・楊汝士・楊敬之・楊漢公・李漢・崔球・魏謩・權璵・崔鉉、(蔭)杜棕。

② 非郡望5。(進士と制科)牛僧孺・白居易、(進士)李景讓・白敏中、(胥吏)劉栖楚。

③ 家柄不明16。(進士と制科)李甘・張仲方・張又新、(進士)劉蕡・張元夫・令狐楚・令狐綯・周墀・熊望・吳汝納、(不明)李續之・李咸・李翰・張鷟・蕭澣・蘇潁。

「李黨」二十二入。

④ 郡望12。(進士と制科)李回・鄭畋・鄭亞・裴度、(進士)李紳・李讓夷・崔郾・陳夷行・韋瓘、(蔭)李德裕・鄭

覃、(書判拔萃) 崔珙

⑩ 非郡望<sup>7</sup>。(進士) 李商隱・崔陵・封敖、(武人)

王茂元、(不明) 薛元賞・薛元龜。

⑪ 不明<sup>3</sup>。(進士) 劉軻・劉三復・劉鄩。

郡望の家柄が否かは前稿と同じく太平實干記を標準にし、仕官の状態については列傳と徐松の登科記者三十卷によつた。科擧と黨争との關係で同年進士が問題となるので原表には合格年度を記載したが、いまは典據と共に省略する。科擧登第者について、登科記者は史料を博搜して出来榮えの良いものであるが、本表の内、楊嗣復の博學宏詞科(制擧)と崔珙の書判拔萃の兩者はこの書に收録されていない。これは今後この書を扱う際に注意せねばならぬ點である。この兩人以外にも、この書には博學宏詞と書判拔萃の兩科に省略されているのがかなりあるようで、徐松は十分の自信のない限り、兩科の採用には用心しているらしい。書判と宏詞には、制科としてのものと吏部での採用試験としてのものとの二種類あつたのかもしれない。

⑫ この場合の李は李宗閔を指す。

⑬ 拙稿「三司使の成立について」一四四頁、(史林四四の四)諸使が憲官を兼ねたことにつき柳宗元の「諸使兼御史中丞鑒記(貞元二十年作)」(柳河東集二二)に「古者交政於四方。謂之使。今之制。受命臨戎。職無所統屬者。亦謂之使。凡使之號。蓋專焉而行其道者也。開元以來。其制愈重。故取御史之名而加焉。至于今若干年。其兼中丞者若干人。其使絕域・統兵戎・按州部・專貨食。……假是名以蒞厥職。而尊嚴若

是」とあるのはごく要領をえた記述である。使職は令外の官(職無所統屬者)であるが、開元いご諸使の制が重要となるにつれて憲官(御史)を肩書きとしてもつようになり、その結果、御史中丞(正五品上)を兼ねる者さえ出るようになった。その使は軍事關係だけでなく州關係や財政關係のもあり、彼らは官の名を假りてその(使)職の任務を行なつたといふのである。

⑭ 「使院新修石幢記」(金石萃編一〇七)にみえる攝支度推官などの攝<sup>7</sup>については通典(卷三二)に「(判官・支使・推官)皆使自辟召。然後上聞。其未奉報者稱攝」とあるのを参照。河北三鎮では以前から當り前のことだが、このころ藩鎮が中央から獨立する時の條件は「自署置官吏。圖版・稅入。皆私有之」(新唐書二一〇)であつた。

⑮ 舊唐書(卷一七六)楊嗣復傳に「嗣復與牛僧孺・李宗閔。皆權德輿貢擧門生。情義相得。進退取捨。多與之同」とある。門生故吏と朋黨との結びつきにつき、五代史記(卷三五唐六臣傳)に「門生故吏謂之朋黨可也」とあるのを参照。

⑯ 吳廷燮「唐方鎮年表」に檢するに、元和元年(八〇六)から大中十三年(八五九)の間に兩派の首腦陣が出鎮した節鎮の數は三十三、延べ百人、内譯は牛黨58人・李黨42人となる。就中、淮南12・西川10・東川6・山南西8・山南東5・河中5。

⑰ ヨハン・ホイジンガはいう。「中世末期は黨派の争いの盛んな時代である。……中世末期の黨派争いの究明の爲には政治經濟的見地より、社會學的見地の方がさしあたりずつと役に

立つのではないか」(中世の秋、邦譯二二頁)と。

⑬

新唐書(卷一八〇)に「俄而(李)宗閔罷。(李)德裕代爲中書侍郎集賢殿大學士。始二省符江淮大賈。使主堂廚食利。因是挾貨行天下。所至州鎮爲右客。富人倚以自高。德裕一切罷之」とある。これは横山裕男氏が「唐代の捉錢戸について」(東洋史研究一七の二)で引かれた冊府元龜(卷五〇七)太和七年八月の條とつながり、六月に李宗閔が山南西道節度使に追われ、實權が全く李德裕の手に落ちた直後に出された勅で「如聞。皆是江淮富豪大戸。納利殊少。影庇至多。私販茶鹽。頗撓文法。州縣之弊。莫甚於斯。宜並勒停」とある。横山氏は「州縣では中書省・門下省の特許を有する彼等の背景にあるものが恐いので取締ることが出来ぬ有様であった」とのみ言っておられるが、この勅の意味する所を正確に把握するには、この直前に政權が牛黨から李黨に移つたというところ、牛黨はそれら江淮富豪大賈といった人々に支えられていたという點を確認する必要がある。氏の引かれた崔從の上奏も彼が李黨であつた(新一一四)點を考慮すべきであろう。

隋文帝による中正と辟召制の廢止が、門閥貴族を「官僚貴族」化させたことを端的に示すものとして、劉秩の論(通典一七)に「隋氏罷中正。舉選不本鄉曲。故里閭無豪族。井邑無衣冠。人不土著。萃處京畿。士不鉅行。人弱而愚。……近則有封建而無國邑。五服之內。政決王朝。一命免拜。必歸吏部。按名授職。猶不能遣。何暇采訪賢良。搜覈行能耶」とあるのは最も注目すべきである。衣冠士人が地方に土著せず京

畿に萃まりすむような變化が現實に起つたのである。

⑭

鹽鐵尙書とあつても鹽鐵使の雅名のこと、四字に伸ばしたにすぎない。これは、薛逢の「上鹽鐵崔尙書書」(全唐文七六六)の崔尙書が鹽鐵使崔珙に違いないことより明らかである。

⑮

唐末になると商人の子弟さえも登科した。宇都宮清吉氏「唐代貴人に就いての一考察」七四頁、(史林一九の三)。

⑯

五代の辟召の好例に淳于晏がある。五代史記四六霍彥威傳に「彥威高其義。所歷方鎮。常辟以自從。至其家事無大小。皆決於(淳于)晏。彥威以故得少過失。當時諸鎮辟召寮屬。皆以晏爲法」という。

⑰

續資治通鑑長編(卷二一一・熙寧三年五月癸卯)に「祖宗之朝。或有起孤遠而登顯要者。蓋天下初定。士或起草萊而不用。故不得不廣搜揚之路。自眞宗仁宗以來。雖幽人異行。亦不至超越資品。蓋承平之代。事有紀律。故不得不循用選授之法」とある蘇頌の言は、眞宗いご新しい階級が固定したことを述べたものであろう。なお誤解をさけるために付言すれば、唐の辟召は彫匠とか投名とかいう現象と同じではない。それらを含むことは否定できないが、使職全般を通じてずつと幅の廣い現象を起したものである。

⑱

牛李の黨争が辟召制と密接な關係のあつたことにより、古來この時期の特色とされてきた藩鎮の跋扈・宦官の禍・朋黨の禍の三者は、現象的には確かに個々別々のものではあるが共に使職を中心にして展開したので、三位一體とも言ふべきものであると考えるのである。